

アメリカの表現者たちは いま、何を感じているのか



ふじい ひかる
藤井 光
(大学文学部准教授)

アメリカ小説の研究と翻訳

僕の研究対象は現代アメリカ文学です。「現代」といつても、どこからどこまでを指すのかは人によって様々ですが、僕の場合は1980年代から始まって、21世紀のまさに現在進行中の時代を主な対象にしています。そのなかで、作家たちの「アメリカ観」がどう小説に表現されているのか、が研究の軸になります。また、研究と平行して、現代アメリカ小説の翻訳にも取り組んでおり、主にここ10年ほどの間にデビューを果たしてきた、僕と同年代の若手作家たちの作品を日本の読者に紹介する機会をもらっています。

アメリカと作家たち

アメリカ合衆国という国、あるいは「アメリカ」という言葉の持つ響きは、ここ15年ほどを取ってもかなり変化してきました。もう少しタイムスパンを長く取り、1950年代と比べれば、その変化はさらに歴然とするはずです。かつては物理的・精神的な豊かさの象徴でもあったアメリカは、2001年の同時多発テロ以降に独断で戦争に突入したことにより、

国際的な存在感を失ってきたからです。唯一の超大国であると同時に、世界からは煙たがられる存在となったアメリカは、文化的な求心力にも翳りが見られるようになりました。

そのような状況において、アメリカの作家たちは何を感ず、何を表現しようとしているのか。それが僕の関心事です。アメリカ文学は建国以来、一貫して「アメリカとは何か」を問い続けてきました。諭えるならば、アメリカという国を心配そうに見守り忠告する「伯父さん」のような役割を、文学は引き受けてきたと言えるかもしれません。現代作家たちも、冷戦やベトナム戦争、あるいは田舎町の様子を通過して、アメリカの姿に疑問を投げかけつつ、あるべきアメリカの未来像を提示しようとしています。

その流れに新しく加わったのが、アメリカ合衆国の外に生まれ、アメリカに移住してから英語を習得し、英語で創作するようになった、アウトサイダー作家たちです。旧ユーゴスラビア生まれの作家、メキシコ生まれの作家、ペルー、中国、さらには日本……と、実にさまざまな作家たちが、アメリカ文学という舞台に参

入ってきているのが、21世紀の大きな特徴です。グローバル化は文学においても着実に進行しているわけですが、それはアメリカの「覇権」の拡大とは逆だろうと僕は考えています。むしろ、多種多様な声が、アメリカの小説、そして英語という言語に流れ込み、アメリカに対して播さぶりをかけてくるような現象が、今の文学で起きつつあると言えるのかもかもしれません。

「ディスカッション」の授業

僕の授業は主に、いわゆる「ゼミ」と翻訳のクラス、そして講義の3種類になります。どの授業をするにあたって、僕はなるべく学生たち同士が話し合える環境を用意するように心がけています。

ゼミの授業は受講者によるディスカッションを中心としています。教師としての僕の役割は、まず題材となる作品を決め、全員がそれを読んできていることを前提として、受講者を数名ずつのグループに分け、僕のほうで用意した質問を投げかける、というものです。ディスカッションが行われる間、僕は各グループを回り、質問に答えたり、議論が行き詰ま

っているようであれば何らかの助け舟を出して話が進むようにします。そこでふと出る視点や意見は、僕にとつては大きな刺激になっています。こうして、90分間の授業の大部分を通じて、いわゆる「教壇」は無人の状態になります。授業の最後には教師らしいことをしようと、僕は教壇でクラスの意見をまとめながら、自分なりに気がついたことなどを話します。

講義では、文学作品が登場する時代や社会背景について話すことが中心となります。人数が多いと、さすがにディスカッションはしづらいのですが、受講者の側が受動的にならないように、授業の途中で何らかの作業をしてもらい、そこで出たアイデアや意見に僕の側からも応答するようにして、授業でのやり取りを実現しようとしています。

文学作品の楽しみ方や、物語について感じることは、一人ひとりの読み手によって異なります。そのどれかが正解で、他が不正解であるわけではなく、多様な意見を受け止める包容力が文学の魅力であると僕は思っています。それをなるとは損なわず、かつ、一人ひとりがその先

に考えるべきことに気づく場として、授業での時間を過ごしてもらえればと考えています。単に知識を覚える場ではなく、他の人たちからインスピレーションをもらおうような、そんな経験をしてもらいたい、それが僕の願いです。そして、一番そこで刺激をもらい、様々なことに気付き、僕なのかもしれないのは、他でもない教師の僕なのかもしれません。



典型的な授業風景。発表者は学生で、僕は一参加者としてディスカッションに加わっています。



ながさわ せりか
長澤 勢理香
(大学経済学部助教)

奴隷貿易の経済学

私は18世紀頃のイギリスによる大西洋奴隷貿易の支払いネットワークについて研究しています。奴隷貿易というと、武器を持った奴隷商人がアフリカ大陸で「奴隷狩り」をしたイメージを持たれる方もおられるようですが、実際には大西洋奴隷貿易の最盛期では様相が異なります。

大西洋奴隷貿易

少し具体的に奴隷貿易の仕組みを説明します。ヨーロッパの国々による大西洋奴隷貿易は15世紀から行われていました。初期には奴隷商人が直接奴隷を捕まえてくるというようなこともあったでしょう。イギリスが正式に奴隷貿易を国家事業化したのは17世紀後半になってからでした。この点ではイギリスは後発国といえます。この頃までにはヨーロッパの奴隷貿易国家は西アフリカに砦を築いて現地の奴隷商人と取引を始め、あるいは現地の仲介人を介して奴隷を手に入れるようになっていました。アフリカにおける取引では基本的に通貨は用いられず、ビーズや綿とリネンの混織をはじめとするヨーロッパ商品と奴隷が物々交換されました。奴隷を入手した奴隷船はそのまま新世

界、すなわちアメリカ方面へ向かいました。現在のアメリカ合衆国南部は奴隷制の舞台となったことで有名ですが、イギリスはカリブ海諸島も大勢の奴隷を輸送しました。当時イギリスでは紅茶文化が急速に浸透し、同時に砂糖に対する需要も拡大していました。これにともない、カリブの砂糖プランテーションでは労働力として絶えず奴隷の輸入が必要だったのです。

奴隷船はジャマイカやバルバドスといったカリブの島々で奴隷を販売するわけですが、このとき代金は砂糖などの植民地物産で受け取り、これらを積んでイギリスへ帰りました。本国を出発したのち同一船で西アフリカ、新世界植民地を経て本国へ帰還する、いわゆる三角貿易です。この貿易形態は18世紀前半まで続きました。

ところが、18世紀の中頃までにこの形態は変化します。三角貿易は徐々に奴隷貿易と植民地（砂糖）貿易に分離しました。西アフリカで奴隷を入手した奴隷船は新世界の植民地で奴隷を販売したあと植民地物産を積載せずそのまま本国へ戻るようになったのです。それまで砂糖や棉花などで受け取っていた奴隷代金は代

わりを為替手形で受け取り、それらは本国で換金あるいは裏書譲渡されました。一方、奴隷船によって輸送されなくなった砂糖は、専用船が本国と植民地間をシヤトル貿易することによって奴隷貿易から切り離されました。奴隷船のサイズは砂糖専用船に比べて小さく、大量に砂糖を輸送するには適していなかったからです。また、食べ物である砂糖が奴隷船で運ばれることに難色を示す人々がいいたことも伝えられています。

支払いネットワーク

さて、この奴隷貿易構造の変化は奴隷商人にとってどう影響したのでしょうか？彼らは植民地貿易の機会を失いましたが、一方で奴隷貿易が効率化されました。三角貿易時代には、奴隷を売却した後も砂糖による代金回収のために、集荷が完了するまで奴隷船は現地で留まっています。奴隷船が集中するシーズンには砂糖は品薄になるうえ、停泊している間も係留、食事など諸経費はかかります。奴隷船はできるだけ早く本国に帰ることが期待されていました。加えて、この時代イギリス船は他国船に拿捕される危険が常につきまといっていました。もし砂糖

を満載した奴隷船が敵国フランス船に捕まってしまうたら、大西洋を股にかけて1年近くかかった事業の収益はゼロです。保険を利用して船体などの投資額は戻ってくるかもしれませんが、それでも奴隷商人にとっては大損害です。このように貿易構造の変化は、奴隷貿易のコストやリスクの削減につながりました。

前置きが少し長くなりましたが、私の研究テーマは、このカリブ海地域で奴隷代金として使用された為替手形とその信用ネットワークについてです。このような手形が振り出され、なおかつ引き受けられるには、事前に取り決めがなされていることが条件になります。当時書かれた手紙や文書を読むと、奴隷貿易に使用された為替手形は主にカリブ海や北米植民地在住の奴隷ファクターと呼ばれる商人が振り出したことがわかります。奴隷ファクターは、現地の奴隷の出身地別需要や市況などの情報を保有しており、地の利を生かして奴隷の販売会を奴隷商人や船長に代わって催行しました。厳密には彼らは販売代理人であったにもかかわらず、実際の買い手であるかのように奴隷の代金として為替手形を振り出しました。これらの為替手形を引き受け、支払

いを約束したのがイギリス本国在住の商人です。彼らのなかには、西インド諸島で生産された砂糖の委託販売を行い、そのプランテーションの収益から奴隷代金を支払うといった商人がみられました。彼らは西インド諸島の奴隷ファクターと血縁関係や提携関係がありました。つまり、大西洋をまたぐネットワークによって奴隷貿易の円滑な支払いが実現し、奴隷貿易や砂糖貿易自体も効率的に運営できるようになったといえます。奴隷貿易は暴力的かつ人類の負の歴史です。一方で、効率性や収益性を重視したビジネスでもあったのです。

しかし史料の制約もあり、このネットワークに関する研究はあまり進んでいません。入手可能な史料は限られているうえ、書き手の癖字や虫食いだらけの文書解説は非常に時間がかかります。私の研究では当時の手書き文書を用いてこのネットワークの社会経済への影響を明らかにしようと挑戦しています。資料館や室内での解説作業が多い研究ですが、テーマや視点は大西洋規模、地球規模にまで広げて今後も研究に取り組みたいと思います。

学生とともに進む、私の教育と研究



おおた やすし
大田 靖
(大学文化情報学部助教)

私の研究

私は文化情報学部で数学を中心に教育研究を行っています。研究テーマは「金融・経済に現れる現象の数理モデル化及びその解析」です。特に、金融の分野で登場するブラック・ショールズ方程式に興味を持ち、「逆問題」とよばれる物理や工学の分野で利用されている数学の理論を、金融の分野に応用することを目標に研究を進めています。通常我々が問題を考えるときは問題から答えを導く方法を考えますが、これは「順問題」と呼ばれています。一方「逆問題」とは、答えから問題を推測することです。例えば、「ウイルスが体内に侵入すれば風邪を引く」と考え、ウイルスの種類を特定し風邪薬を処方することは順問題です。一方で、「風邪を引いた、ではその原因はどんなウイルスだろうか？」と風邪の症状からウイルスの種類を推測することが逆問題なのです。つまり「原因から結果を求める」ということが順問題であるならば、逆問題は「結果から原因を求める」ということです。私の研究目標は、オプション価格の情報より「この価格になる

にはどのような原因が考えられるのか」をこれまでに蓄積されている逆問題の手法を用いて解明することです。

教育の進化（学生とともに）

教育面では主に、学部の初年度の学生を対象にデータサイエンス、数学入門などを教えています。データサイエンスとは、簡単に言うと、様々な対象のデータを適切な方法で収集、解析を行い今まで気づけなかった新しい事実を浮かび上がらせる研究手法のことで、非常に新しい学問です。この学問の魅力の一つは対象とするデータの幅広さであり、物理・化学・医学などの自然科学に限らず、言語・社会・音楽・芸術・心理・歴史などの人文社会科学分野も分析の対象としています。特に文化情報学部では、このデータサイエンスを教育の柱として考えています。2011年度から、この関連科目であるデータサイエンス入門に関して、新しい取り組みを行いました。この科目は3人の教員が各クラス100人超の学生を対象に講義を行うため、ともすると一方通行的な講義形式になりがちです。この点を改善するために担当の教員との間

で何度も話し合いを行い「講義型の授業ではあるが対話式・参加型の授業を作ろう」という挑戦的な目標を立て、今年度はその実現のために各クラスで5〜6人程度のグループに分けて授業を行いました。今年度の講義を終え、反省点や改善点も色々ありました。最も大きな成果は、学生の授業へ取り組む姿勢が格段に変わった点です。特に学生の目の輝きは格段に変わりました。この授業はまだまだ発展段階で色々改良の余地があると思いますが、教育に熱い先生方の気持ちと、楽しみながらも真剣に授業に取り組む学生の姿勢は、私をますますやる気にさせてくれます。また、今年度は数学入門の授業についても大改革を行いました。いきなり初回の授業でお手玉を持って登場し、「火花をもっとも綺麗に見せるためにはどこで爆発させればよいか」といった問題を学生に投げ掛けました。この問題には、二次関数、微分、物理学、微分方程式など様々な問題の基礎的な部分

が隠れているのですが、学生はその疑問に答える形で授業に参加し、日常で使われている数学の大切さや面白さをつかみ取ってくれたのではないかと思っております。他にも、「紙を折り続けて宇宙まで行こう」と今から資産運用をしよう」など日常を意識した問題を授業で取り上げました。こちらの授業もまだまだ改善の余地がたくさんありますが、楽しんで授業を受けたり質問してくれたりする学生を見ていて、私自身も授業を行うことが本当に楽しく、毎回楽しみな授業になりました。また、4年次でのゼミで頑張る学生の姿も非常に印象に残っています。文化情報学部では4年次でのゼミが必修であり、更に卒業論文の提出が義務付けられているのですが、学生は本当に様々なテーマを深く掘り下げ、私自身も驚かされるほどの結果を出してくれます。その過程で、研究に対して真摯に取り組む議論を重ね、時には徹夜をしてまで頑張り続け論文を書き上げる学生の姿を見てみると、私自身の研究心も掻き立てられます。

同志社「シャボン玉」について

最後に同志社で過ごしてきた4年間で、もう一つ力を注いできた京田辺祭について触れておきます。文化情報学部では「シャボン玉のふしぎ」と題して、割れにく

く人が入れるくらいのシャボン玉を作成し、来場者実際にその中に入ってもらい、シャボン玉越しから見える風景を通して科学の不思議を体験してもらっています。この企画は2年次生を中心に1年次生から4年次生までの学生が企画、実験、当日の運営の全てを行う横断的な学部企画であり、今年度は特に好評で、2日間の合計の来場者は1000人を超え、大盛況のまま終了の時間を迎えました。4年間この企画を担当して特に印象に残ったことは、来場者の本当に楽しんでる姿や「今年も来ました、来年も楽しみにしています」といった喜びの声はもちらんですが、学生たちが京田辺祭当日まで、時には徹夜に近い状態で準備を重ね、更に当日は休憩もあまり取らず、来場者に対して真剣かつ丁寧に接していた姿です。

以上のように同志社での私の生活は、忙しいながらも非常に充実したものになっています。今後も、一人でも多くの学生が輝ける環境づくりを心がけながら、私自身も全力で教育活動・研究活動に取り組んでいきたいと思っております。

障がい者クロスカントリースキー 選手の最先端トレーニング



ふじさわ よしひこ
藤澤 義彦
(大学スポーツ健康科学部教授)

パラリンピック

「私の研究・私の授業」では、私の専門分野や授業内容を紹介するところですが、今回は、私が協力したソチパラリンピック、クロスカントリースキー代表選手のトレーニングを皆様にご紹介したいと思います。

その前に、少しパラリンピックの説明をしたいと思います。パラリンピック(Paralympic Games)は、国際パラリンピック委員会(IPC)の主催する、障がい者を対象とした競技大会です。夏季大会は、1960年のイタリア・ローマで、冬季大会は1976年のスウェーデン・エーンシェルドスピークでそれぞれ第1回大会が開催されています。このパラリンピックという名称は、実は、パラプレジア(Paraplegia: 下半身麻痺者とオリンピック(Olympic Games))を合わせた日本人の造語で、当初は大会の愛称として使われていました。それが1988年のソウルから「パラリンピック」が正式名称となりました。

現在のパラリンピックはパラレル(Parallel)とオリンピックとの造語で、「もう一つのオリンピック」を意味していると考えられています。面白いことに、オリンピックをよく「五輪」と言いますが、実はこの「五輪」という言葉も英語の直

訳ではなく、日本人のジャーナリストが作った造語です。「パラリンピック」といい「五輪」といい、日本人が作った「言葉」というのが面白いところです。今回のソチパラリンピックでは、アイススレッジホッケー、車いすカーリング、アルペンスキー、バイアスロンとクロスカントリースキーの5競技が行われます。

クロスカントリースキーのトレーニング

今回のトレーニングは、2013年6月から9月の間に4回、同志社大学磐上館をフルに使って行われました。このトレーニングは、(株)日立ソリユーションズのクロスカントリースキー部からの依頼で実現したものです。日立ソリユーションズは、以前から障がい者スポーツの普及、発展に力を入れられており、クロスカントリースキー部にも男女各2名の選手が所属しています。この4名の選手は、いずれも2013年6月時点でソチパラリンピックの代表選手に内定しており、8ヶ月後の大会に向け本格的なトレーニングを開始することになっていました。通常、スポーツのトレーニングは、試合と同じ環境で行う必要があります。しかし、ノルディックスキーのような雪上で行うスポーツは、夏に冬と同じ環境を作り出すことはほぼ不可能です。ノル

ウェーやフィンランドのようなノルディック大国では、1年を通じて雪上トレーニングが可能な施設を持っています。日本にはありません。そのため、日立ソリユーションズは、まずソチの現地コースを映像に取め、そのコースの起伏や距離をGPSデータとしてコンピューターにプログラミングしました。その画像を、スポーツ健康科学部が所有する大型トレッドミル(ベルトコンベアーのような測定機器)と連動させ、コースの起伏に合わせてトレッドミルが上下に動くシステムを開発しました。これにより、選手は大型スクリーンに映し出されたソチのコースを見ながら、ローラースキーを履いてトレーニングが出来るわけです(写真参照)。

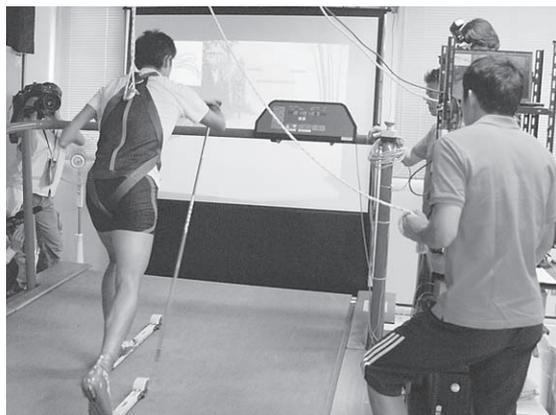
クロスカントリースキーはよく「雪上のマラソン」と表現されますが、そのたとえの通り、今回のトレーニングでもトレッドミルの上で、1人最大約90分間の走行練習を行いました。このような実戦さながらのトレーニングに藤澤ゼミの学生が参加して、選手の身体的変調を測定しました。

私は同志社大学就任以来、スポーツ選手の身体的「資質」に関する研究をしています。スポーツ選手に様々な測定を行い、その選手が持っている優れた資質、特に優秀な選手が持っている資質を見つ

け出すことと、その資質を伸ばすためのトレーニング方法を研究しています。今回は、障がい者クロスカントリースキー日本代表選手に筋力、持久力、敏捷性、パワー等に関する測定を行い、世界的クロスカントリースキー選手が世界のトップを維持出来る「根拠」を見つけ、それを卒業研究のテーマの一つとしました。はつきり言って大それたテーマを設定してしまいました。一般にクロスカントリースキー等の全身持久力が必要とされる選手は、短距離選手のような敏捷性やパワーには関心を示さないものです。しかし、今回はあえて様々な測定を行い、クロスカントリースキー選手を見てみました。これはゼミ生にとっては、またとないチャンスであり、各自の卒業研究の貴重なデータ収集とともに、学生時代の思い出になったと思います。

終わりに

今回、スポーツ健康科学部は、ソチパラリンピックの成功を期待し、日立ソリユーションズスキーチームのトレーニングを全面的にバックアップしました。このトレーニングは、元々東京にある国立スポーツ科学センター(JISS)にあるトレッドミルを使用する予定だったようです。しかし、JISSは、文部科学省の管轄で厚生労働省が管轄するパラリ



ンピック関連の競技種目は、現行の規定では使用出来ません。そのため、JISSと同じトレッドミルを所有する同志社大学スポーツ健康科学部に依頼が来たわけです。しかし、このような日本独特の「行政の壁」も2014年度からは撤廃され、オリンピック選手とパラリンピック選手が自由に同じトレーニング施設を使用できるようになります。我が国もやっとスポーツ先進国に近づいたということでしょうか？


 こばやし たかあき
 小林 賢章

(女子大学表象文化学部教授)

平安時代の時間表現

『古今和歌集』638番の歌は恋の部の「藤原経朝臣」の次の歌である。

638 明けぬとて今はの心つくからに
 などいひしらぬ思ひそふらむ

638番の歌の解釈から始めよう。本歌の注釈は、諸注釈書によって、あまり差異はない。『古今和歌集』注釈書の最近の一つ、高田祐彦の「角川ソフィア文庫」の注を見てみよう。「夜が明けたということ、もうお別れだという気持ちになるやいなや、どうして言い表しようもない思いが加わるのであろうか。」がその口語訳である。本論で問題とするのは、638番の冒頭部「明けぬとて」の部分であるから、口語訳をもう一度確認すると、「夜が明けたということ」の口語訳がつけられていることがわかる。

男が女の家を出るのは真つ暗

ところがこれが間違っていたのである。当時の恋愛は男が女の許に通う妻問婚であつたことはよく知られている。そして、男性が女性の家に出かけ、また帰る時間は、「宵暁の出入り」と表現されていた。

男は女性の家に、宵に出掛け、暁の時間に帰宅するという意味である。男の暁の様子を面白おかしく評論したのは清少納言だつた。清少納言は『枕草子』の中で次のように述べ始める。「暁に帰らむ人は、装束などいみじううるはしう、烏帽子の緒、元結固めずともありなむとこそおほゆれ、いみじくしどけなく、かたくなしく、直衣、狩衣などゆがめありとも、誰か見知りて笑ひそしりもせん。」(六十段)

以下興味深いことが書かれている。古典作品中、私のようながさつな男に、最も興味ひかれる古典作品の一節をといわれたら、間違いなくこの六十段を挙げると思う。ここで面白いことは、女の家から帰る男は烏帽子が曲がついたり、髪が元結ひが緩んでいたりしても良いと主張する。そしてその理由は、「誰か見知りて笑ひそしりもせん」だからだといっていることになる。もし、638番の歌の高田の解釈のように、夜が明けて女の家を出たなら、誰も見知ることがないなどと、どうして言えようか。それも、女の家からの帰り一目でわかるしどけない姿をしていたらである。この時間まだ暗いこ

とは、六十段の後の部分にも見いだせる。男が女の家から帰る暁は原則暗いものだったのである。

現代では暁は明るい時間帯を意味する。古典の世界では、明るい暁もあるが、暗い暁もあるとされてきた。そして、その開始時刻は午前三時だと主張したが、私の主張だつた。この午前三時は、丑の刻と寅の刻の間の時間をさすが、当時はこの時間に日付が変わっていたのであつた。日付が変わった以降が暁だつたのである。もちろん、時間がたてば、明るい暁も存在したろうが、男は女の家を午前三時になる鐘(それを「暁の鐘」という)にせかされて、女の家を出たのだつた。

動詞アクは午前三時になること

実は、私の発見主張のもう一つの重大点は、この午前三時になる、日付が変わる意味を動詞明くが表現しているという事実だつた。

638番の歌の冒頭、「明けぬとて」は午前三時になつたのと口語訳されなければならなかつたのだ。もちろん辺りは暗

い。暗い中を男は女の所から帰って行つたのである。

「今はの心」はさよならというべき気持ちか湧くことであり、「などいひしらぬ思ひは」口では言えないつらさの意味である。

この時、夜空に照っている月が有明の月であつた。従来、暁と有明の月の同時性は指摘されてきた。それでは、「有明の月」のどの部分に午前三時以降の意味が含まれているか。「有明」は有りとも明けの複合語である。「ありあけ」の中に動詞明くが含まれていたのだつた。「有明の月」は動詞明くより、不幸な解釈の道をたどつた。平安時代末の歌論書『袖中抄』に、「有明は「夜の明けて」出ている月だと書かれていたためだ。「有明の月」は今日でも、夜が明けて出ている月と古語辞典に注が出ているのはそのためだつた。有明の月が夜が明けて出ている月なら、「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」の歌は成立しないのであつた。ほかに多くの和歌・散文の注釈が変わらねばならないことは、十分予想される。

研究の広がり

私の研究テーマは平安時代の時間表現である。午前三時の前を取り上げよう。午前三時以前は夜半と呼ばれた。

明日あると思う心の浅はかさ

夜半に嵐のふかぬものはかの歌は、親鸞の歌とも蓮如の歌とも言われ、真宗などで世の無常を表すときに使用される歌だが、「夜半に木の葉が散る」とどうして「明日あると思つ」てはいけないのだろうか。明日は午前三時に始まるその前までが夜半であつた。明日が来る直前に変事がおこることがあるぞと上人はおしえていたのである。

実はこうした研究はまだ端緒にたつたところである。同志社には若い有為な若者が多い。わたしの研究に興味を持たれた人は、研究室への来訪を待っている。

かんじる ゆめみる といかける

～小学校校歌から1年生の授業を考える～



すずき しおり
鈴木 志織
(小学校教諭)

豊かな言葉とは

ひらがなやカタカナを覚えたばかりの1年生が言葉の多様性に気づき、言葉の学習を楽しみたいと感じられる授業にしたいと考えています。話をすることで楽しい、誰かに聞いてもらいたいと感じ、話す楽しさが言葉に対する興味関心・豊かな言葉につながっていくと思います。しかし、豊かな言葉とはどんなものでしょう。そう考えたとき、その子ならではの顔が見える言葉なのではないかと考えます。

この時期の子ども達は、話したいことがたくさんあります。朝、教室に入ってくると昨日の帰り道の話や朝ごはんの話やら次から次へと話がとぎれませんが、普段子ども達は、話したくなったら、話し出します。そして、話したいことを話し終わると興味がなくなり、ぷいっとどこかへ行ってしまうのです。

授業の中では、興味のあるなしに関わらず、共通の物を見ることで、新しい世界に出会い興味を持っていくきっかけになってほしいと思います。いろいろなものを観察しています。

まず、見る

まず、見ます。とにかく見ます。教室で観察物を見始めると子ども達はどんな

どん引き込まれていくことがわかります。そして、見つけたことを絵や言葉にします。5月に朝顔の芽が出ました。1年生といえども、相当な観察力があります。細かい点までしっかり見る態度に驚かされます。



「まがっているやつや、せがたかいやつ、ふつうのやつ、いろいろあったよ。(A君)」

この児童は、アサガオを比べて見えています。さつと見たわけではなく、じっくり見ているのがわかります。

「あさがおのめがなすびみたいでした。むしがいて、いまのむしがふんをだしました。ほんとうにはらがたちました。(B君)」



この児童は、今まで見たことのあるなすびと比べて似ていると捉えました。そしてふと横を見ると虫がいて、急に腹が立つてきたのです。なぜかという自分の大切な朝顔の葉に糞をした瞬間を見てしまったからです。じつと見なければこの思いは生まれてこないし、言語化するに至りません。とにかく見る、じっくり見れば言葉も生まれてくるのです。

じつと見れば感情が動き出す(感じる)

授業でなぞなぞを作る授業をしました。答えは空豆。空豆の特徴を言葉で説明して、「こたえはなあんだ。」としめくりします。まず、見るが大切だと一人ひとつ空豆を渡し、みんなで観察をします。

すると、子ども達は「わっ、ふわふわしてる」「やわらかそう」「気持ちいい」「でもこっち、つるんとしてる」と、じっくり細かい点までよく見ました。そして、できたなぞなぞは、「緑の上着、中は白いふわふわ、その中に緑の豆が2こあって豆の上に黒い線がある。こたえはなあんだ。」

問いかけるから 考えるへ

せつかく完成したなぞなぞですが、どうも納得できない子ども達の表情です。なぞなぞになっていないのです。どうすればいいのだろうと問いかけました。子ども達は大きな問題にぶつかりました。

すると、ある子どもが、「緑の豆っていうとすぐわかってしまう。豆って言わないほうがいいと思う。」と言ったのでこの言葉が他の子の思考を変え始めました。すると、また別の子が、「豆の黒い線が矢印に見えるよ。」「ぼくは、豆がラグビーボールみたいな形に見える。」「お

なかの中の赤ちゃんみたい。」「白いふわふわは赤ちゃんのベッドだ。」と違うものに例えて言い始めたのです。じっくり観察したことをもとに、なぞなぞにするにはどうしなければいけないかが、なんとなく子ども達の話からわかってきました。豆が答えなのだから、豆を違う表現に代えてみようという提案だったので、最終的に、みんなで作った空豆のなぞなぞは「ながいながいみたみどりのうわぎ、おなかのなかにはきみどりのラグビーボール。こたえはなあんだ。」



『きみどりのうわぎにふわふわのおなか、おなかのなかにはおつきいあかちゃんこたえはなあんだ。』となりました。納得のなぞなぞが完成しました。

授業で大切にしたいこと

授業の中で、今大切だと感じていることは、記憶や知識に頼らずまず見ることです。じっくり見ること。そして、そこから発見し、感じたことを言葉にする。

観察から自分の感じることを言語へつなげていくことが国語科で大切なのではないのでしょうか。



基本的に子どもたちが持っている、見る・感じる・話すという能力をどう生かしていくかについて考えさせられます。新しい知識を獲得することは大切ですが、今持っているものから気づく力こそが重要です。1年生と一緒に学習を進めるものではないと考えさせられました。知識は、何かうまくいかない時に自分で探し出し、必要だと感じて獲得すべきものだ、改めて子どもに教えられる気がするので。



球根の観察 (C君)